



ジャーナリストをめざす人へ

日本の新聞は、
非を鳴らすことには性急だが、
感銘を伝えることにやや鈍い。
日経の記者には、
ぜひ読者が感銘を受けるような
記事を書いてもらいたい。

自分一人ではできないこと。
自分二人にしかできないこと。
この二つのことをかみしめて、
日経の記者には
スピリット・オブ・ジャーナリズム、
真の意味でのジャーナリズム魂を
発揮してほしい。



「新聞社」に埋没しない記者に

その昔、アメリカの大学院に留学してフォトジャーナリズムを学び、現地の新聞社でもしばらく働きました。知識と経験をもとに、仕事の場を求めて日本の新聞社を訪ね歩きました。その時、ある社のデスクがおっしゃいました。「いい写真を撮るね。しかもアメリカの大学院を出て英語が話せる。優秀なんだ。でもね、うちではいちばん使いにくいタイプだね。目が点でした。(笑) デスクいわく、「知識も経験もないまっさらな人間が望ましい」。いわゆる「うちの社魂」をたたき込みやすいからということでした。

活動ぶりなどさまざまな要素を加味しながら、第三者機関によって毎年客観的な総合評価が下されるんですね。また私が通った大学院では、在学中にスクープ写真をもたなければ単位がもらえなかった。そのため町で何か事件が起きれば、授業を途中で飛び出してもカメラを手に飛び出していったものです。

戦後から半世紀余り、二十一世紀の入り口に立った今、日本のジャーナリズムのあり方も根本から問われはじめているように思います。たとえば「うちの社魂」に象徴される旧態依然の雇用システム。日本では記者がライバルの新聞社に引き抜かれたという話を、私はまた聞いたことがあります。

力ある対象をチエックする意志

が多種多様化してくれば、権力を持つものは、あらゆるところに存在します。そうした力ある対象を、どれだけ強い意志をもってチエックできるか。そうした権力に対する反骨精神がなければ、これからの二十一世紀、ジャーナリストを志望するのはやめたほうがいいとも思います。

本音で生きる時代を意識する

いずれにせよ二十一世紀に入ってこれからの十年、日本のマスコミ、ジャーナリズムのあり方は大きく変わっていくかざるをえないでしょう。少なくとも、例えば大手新聞社の記者であることと既得権益があるとするは、崩れ去っていく運命でしうね。問われてくるのは、一人のジャーナリストとしての個性、そして権力に對峙できる強い意志。そして、

それは、たとえ世間の常識とかけ離れた個性や意志であっても、私はいっこうに構わないと思うのです。それを軌道修正するのは、ペテランのデスクが一人いれはすむことなのです。歴史的にみても、日本全体がひとつのパワーによって、ひとつのベクトルに動くのではなく、ひとり一人の命や価値観がはじめて認められるようになってきたのですから。本音におもしい時代です。テレビというメディアもそうですが、周囲のスタッフに助けてもらわなければ、自分一人では何もできないのです。でも同時に、私にしかできない部分の仕事は、しっかりとやっていた自負もあります。日経の記者には、この二つのことをかみしめて本音ベースで生きられるこの時代に、真の意味でのジャーナリズム魂を発揮していってほしい。

野中ともよ (のなか・ともよ) ジャーナリスト

東京都出身。上智大学大学院文学研究科前期博士課程修了。米国ミズーリ・コロンビア大学大学院留学(フォトジャーナリズム専攻)。帰国後、フリージャーナリストとして活動。1979年～NHK「海外ウィークリー」「サンデースポーツスペシャル」等、1992年～1996年テレビ東京「ワールド・ビジネスサテライト」のメインキャスターを務める。現在、中京女子大学教授、日本体育協会理事、(財)国際交流財団理事、大蔵省財政制度審議会委員、科学技術庁顧問、(社)民間放送連盟放送番組調査委員会。著訳書に「ガンバレ、自分！」(三笠書房)、「アイアン・ジョンの魂」(R.プライ著/清流出版)など。

一人のジャーナリストとしての個性と、権力に對峙する強い意志。

二十一世紀のジャーナリストには、この二つが真剣に問われてくる。ジャーナリズムの世界でも、個人が本音ベースで生きられる時代がやっと始まった。

反骨精神なくして

ジャーナリストはつとまららない。